急性胆管炎患者における入院初日の培養検査実施率

測定対象

《分子》 分母のうち、入院初日に細菌培養同定検査を実施した患者数
《分母》 急性胆管炎の退院患者数

解説

急性胆管炎は、診断がつき次第初期治療として抗菌薬投与が開始されます。起因菌を同定することは治療の第一歩です。ガイドラインでは、胆管炎を疑う症例では総胆管胆汁の培養検査を行うべきであるとされています。なお、血液培養によっても陽性となることが報告されています。

結果

2019 年度	54 %
2018 年度	63 %

分析

急性胆管炎の原因は、総胆管結石、悪性腫瘍に伴う胆管狭窄、閉塞が大部分をしめます。重症例には全例、胆汁培養や血液培養を行っていますが、炎症反応が軽い症例には原因を取り除く（結石除去やステント交換など）のみで培養検査を行っていない場合もあります。